

## 生活史の探求と老農のスピリット

西村 卓

はじめに—最近の研究

- ① 「長野県における勸農社実業教師真鍋猪之吉の活動」
- ② 「『盗難』と村の救済—明治9年に発生した『玄米窃盗未遂事件』—」
- ③ 「鉄道踏切番と強盗—明治17年8月におこった強盗事件—」
- ④ 「『町内記録』にみる近代京都町自治の変遷（1—手洗水町における大正・昭和戦前期—）」

従来の老農論を通しての農業・農村研究に加えて、近代都市京都での「町」という自治組織の歴史的変遷を追う研究と、さらに京都近郊農村である乙訓郡の村で起こった事件を考察することを通して、農業・農村と都市とをもう一度とらえなおす作業を進めている。

### 1. なぜ生活史か？

- ・歴史におけるリアリティをどこに求めるか？
- ・木村礎に見る生活史研究の視点

「ふつうの人々の日常性を中心にして歴史をみる。・・・」

「歴史に対面する態度を生活史的なものにする」

『村の生活史—史料が語るふつうの人々—』（2000年6月 雄山閣出版）

それに基づき、執筆したものが②③④の一連の拙稿である。

#### ②のポイント

近代における村は、村内から犯罪人を出した時に、その犯罪自体が軽微であり、情状酌量の余地があるときに、「救済」という形で対応する。

未遂、経済的困窮（つれあいの病気、娘の奉公、日雇稼ぎ）

#### ③のポイント

村と近代との接点の1つ、鉄道踏切。

明治6（1873）年の「鉄道寮汽車運輸規定」では、門扉は常時鉄道の通過する線路を遮断しており列車が通過する折だけ門扉が開かれた。

拙稿10頁 第2図（東小路踏切感謝見取り図）→道路側に門扉が設置されている。

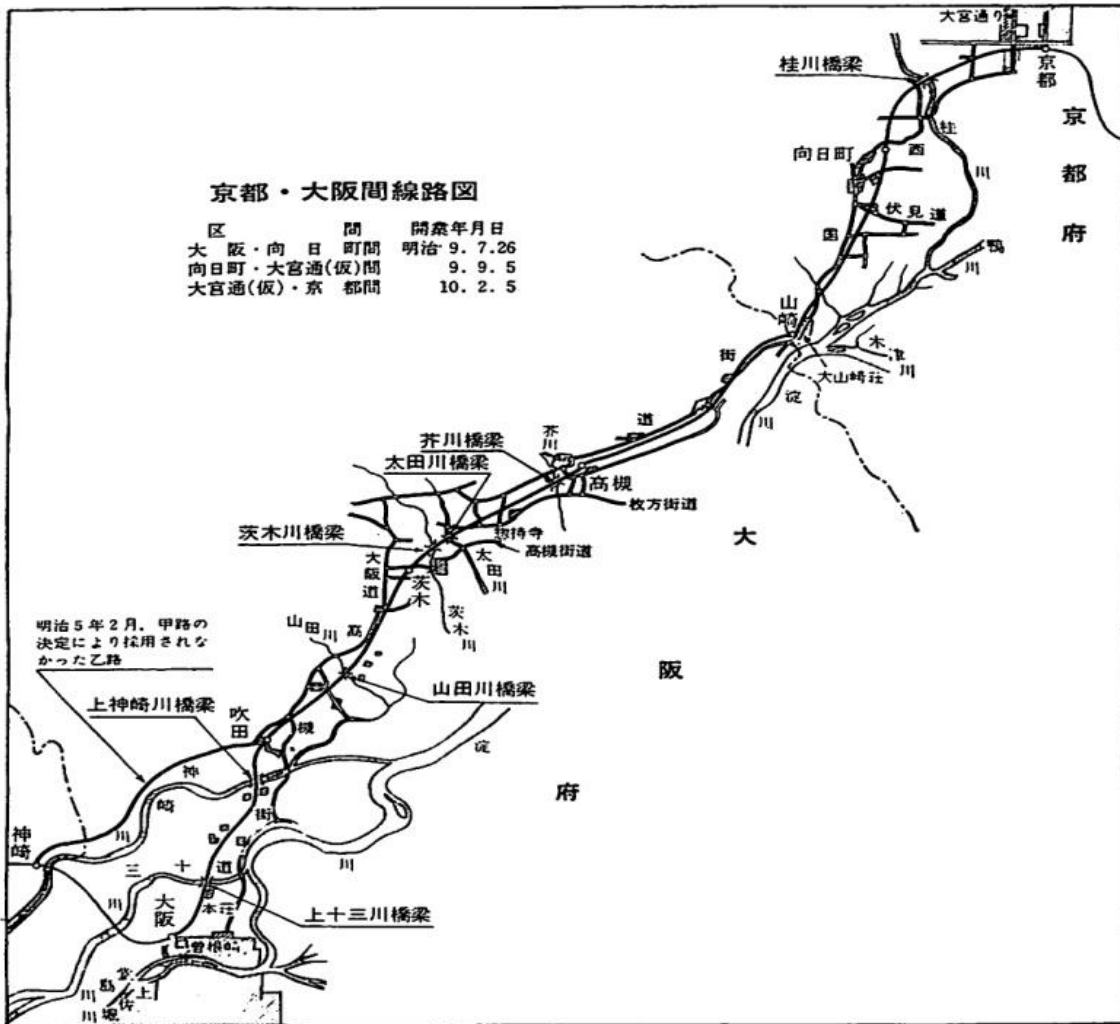


第67図 〈踏切番〉

『東京・神戸間の鉄道』（明治32年刊）

（清水勲『ビゴーが見た明治職業事情』2009年1月 講談社学術文庫 158頁所収）

「慎ましい」近代から「傲慢な」近代へ。



⑤ ポイント



- ・金融街への変貌、戦時町内会制度により、町は消滅。ただし隣組組織として存続し、祭りや旧町財政を維持することになる。
- ・戦後小の復活とともに、神事の復活。ただし、金融街としての実体は進行。現住町民がいない中での神事の遂行。
- ・町自治の核としての神事の存在が重要である。
- ・年中行事としての御千度の復活など。



## 2. 老農のスピリッツ (別レジュメ)

- ・長野県での勸農社実業教師の活動とその後。
- ・勸農社実業教師真鍋猪之吉（明治4年～昭和7年）の身の処し方。
- ・長野りんごの開発者。
- ・恩師 林遠里先生（大正15年1月）終生、遠里を師として仰いだ。

- ① 西村 卓：「長野県における勸農社実業教師真鍋猪之吉の活動」『経済学論叢』、同志社大学、第57巻第4号、1-47
- ② 西村 卓：「『盗難』と村の救済—明治9年に発生した『玄米窃盗未遂事件』—」、『経済学論叢』、同志社大学、第63巻第3号、1-19
- ③ 西村 卓：「鉄道踏切番と強盗」『経済学論叢』、同志社大学、63巻4号、1-19
- ④ 西村 卓・奥田以在：「町内記録に見る近代京都町自治の変遷」『経済学論叢』、同志社大学、63巻4号、21-75